

## 第3章

# 関連施設，団体の歩み

■ 関連施設

■ 関連団体等





# バイオメディカル研究センター

幡野 雅彦

## はじめに

千葉大学バイオメディカル研究センターは平成13年に設立されて今年（平成21年）で8年目になります。これまで、医学研究院を中心として全学における胚工学実験、遺伝子組換え実験の研究支援を行っているほか、専任の教員を中心に疾患モデルマウスを用いた研究を行っています。

今回、医学部の創立135周年記念誌にこれまでのあゆみをまとめる機会を得ました。関係各位には、この小稿を介して現在のバイオメディカル研究センターの現状を知っていただく一助になれば幸いです。この小稿をまとめるに当たり、特にセンター設立のいきさつ等の記載についてはセンター長徳久剛史教授のご協力を賜りました。ここに感謝申し上げます。

## 沿革

バイオメディカル研究センター設立の経緯は、平成13年4月の医学部の大学院部局化のときに、生物（医）学研究に必要となっていた「胚工学」技術の研究支援施設を申請したことに始まる。文部科学省は、この申請に対して、すでに全国の国立大学に設置されていた遺伝子実験施設が千葉大学にはまだ未設置だったので、胚工学センターの申請を遺伝子実験施設の申請とすることで設置が認可された。初めは組織としての設置であり、ポストの純増は認められなかったため、助教授と助手の二つのポストは、医学研究院のポストを振替えた。そして、この遺伝子実験施設は全学の組織であるにも係わらず事務は医学部事務が担当している。それまで遺伝子実験施設に関しては、西千葉キャンパスでの設置要求があったが、もともと全国の遺伝子実験施設は遺伝子操作のためのアイソトープ・センターとして利用されており、西千葉キャンパスにアイソトープ・センターが新設されたことにより、その後は遺伝子実験施設の設置要求がなくなっていたことも、医学研究院にとって幸いした。

平成16年には、亥鼻キャンパスに全国の遺伝子実験施設と同じ面積（1500㎡）の建物の新設が認めら

れた。その時、同時に薬学部の大学院部局化に伴う亥鼻キャンパスへの移転のための医薬系総合研究棟・第一棟（8500㎡）の新設も認められた。そこで、この二つの新設を合築することとなり、亥鼻キャンパスの体育館横に医薬系総合研究棟が竣工し、その8、9階部分に研究室・動物飼育室スペースが確保された。このときに千葉大学では国立大学法人化という大きな機構改革が行なわれたため、遺伝子実験施設という名称も本来の胚工学センターを念頭に置いたバイオメディカル研究センターに改称した。それまで千葉大学の胚工学の技術的研究支援は、医学部附属動物実験施設の4階のSPFレベルの実験室を使って行なってきたが、この建物の新設に伴い、専任教員2名（助教授：幡野雅彦、助手：藤村理紗；当時）と技術補佐員2名（医学研究院から1名と大学本部から1名）の合計4名のスタッフで、本格的なセンターとしての活動が開始された。そして、平成22年の時点でも相変わらず全学の学内共同教育研究施設という位置付けになっている。

平成19年7月に幡野は医学研究院籍（大学院医学研究院疾患生命医学教授）となりバイオメディカル研究センター兼任となりさらに平成20年4月には動物実験施設・動物病態学専任教員である伊藤勇夫准教授定年退職にともない動物病態学も兼任という形になった。バイオメディカル研究センターは主としてトランスジェニックマウスやノックアウトマウスなど遺伝子組換えマウス作製を担当し、また受精卵凍結保存や融解、体外授精によるマウスクリーニング等を行っている。一方動物実験施設においては作成した遺伝子組換えマウスの維持およびそれらを用いた実験を研究者が効率よく行えるよう施設管理、感染管理等を行うという形で機能を分担している。

平成21年4月1日現在のスタッフは以下の通り。

センター長：徳久剛史（兼：医学研究院教授・分化制御学）

教 授：幡野雅彦（兼：医学研究院教授・疾患生命医学）

助 教：藤村理紗（専任）

研 究 員：高野晴子

技術補佐員：花園道子，合田あや

## 研究支援

平成16年4月のバイオメディカル研究センター開設当初より飼育室の整備、マイクロインジェクションの機器整備などのセットアップからのスタートであった。現在ではボイラー、空調機器等の管理に関しては業者委託となっているが当時は毎日のボイラー管理、空調整備、空調フィルター掃除・交換などすべてスタッフ、学生で行っていた。それでも何とかトランスジェニックマウスおよびノックアウトマウスの作製、受精卵凍結保存、凍結卵の融解と胚移植など現在の研究支援体制の基礎を確立して来た。おりしも平成16年2月より「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」（カルタヘナ法）が施行されすべての遺伝子組換え生物の使用がこの法律によって規制されることになった。センターでは研究支援として遺伝子組換えマウス（トランスジェニックマウス、ノックアウトマウス）を作成し、また人工授精によりマウス受精卵の凍結保存等を行っている関係上カルタヘナ法に最も係っていることより、学内遺伝子組換え実験におけるカルタヘナ法運用の相談窓口となっている。また幡野は全学組織である遺伝子組換え実験安全委員会および動物実験委員会の副委員長として千葉大学における遺伝子組換え実験および動物実験の管理ならびに実験計画書審査にあたっている。近年動物実験や遺伝子組換え実験に対する社会の目が厳しいものになっている。5年ごとの動物愛護法の見直しなども考えられている中研究者も自らの研究について社会に対する説明責任が問われている。伝統ある千葉大学医学部が培って来た社会的信頼を維持するためにも研究者一人一人がルールに従った遺伝子組換え実験および動物実験を遂行し社会的責任を果たすことが必須であると言える。

一方で現在遺伝子組換えマウスは医学・生命科学研究には必要不可欠なものとなっている。そのため研究者間での遺伝子組換えマウスの譲受も盛んに行われるようになった。さらに個体で系統維持を行うと非常にスペースと人手を必要とし、このような状況の中センターの業務である受精卵凍結保存および凍結卵融解の需要が急速に増加し平成17年度は凍結卵保存依頼50バイアル程度であったものが平成20年度には10倍以上の550バイアルになっている。今後さらにこのような需要が増えるものと予想され人材及び人件費の確保が課題となっている。

## 研究

バイオメディカル研究センターおよび疾患生命医学の研究は「疾患モデルマウスを用いた疾病の病態解析および新規治療法の開発」を大きなテーマとしている。具体的には免疫異常、発生異常、癌などに焦点をあて基礎的研究および臨床応用への可能性を求めた研究をしている。その1つとして神経堤細胞異常に起因する疾患の病態解析というテーマでヒルシウスプルング病およびその類縁疾患のモデルマウスを作成し病態について解析している。私たちは世界に先駆けてヒルシウスプルング病類縁疾患のモデルマウス（Ncxノックアウトマウス）を作成した。ヒルシウスプルング病では腸管神経節が欠如するために巨大結腸症を起こすのに対しこの病気は腸管神経細胞が増加し、しかも巨大結腸症を呈する。またいまだに腸管の移植しか有効な治療法がないのが現状である。従来この病気は感染や炎症などによる二次的なものであるとの説もあったがこのマウスにより単一遺伝子の欠損で病気が発症することが証明された。特にヨーロッパにおいてヒルシウスプルング病類縁疾患の症例が多くイタリアの研究室などと共同研究を進めている。さらに遺伝学的手法を用いてNcxの標的遺伝子を解析しその機能や疾患との関連についての解析を行っている。

さらにヒルシウスプルング病など腸管神経に異常のある疾患には壊死性腸炎をはじめとした腸管の炎症の合併率が高いことから腸管神経と腸管免疫の関連についてあらたな研究領域を開拓すべく実験を始めている。

その他学内共同研究および学外（基礎生物研究所、北海道大学、千葉県がんセンター、順天堂大学、東京医科歯科大学など）との共同研究により疾患モデルマウスを作成・解析を行いその結果はいずれも一流国際誌に掲載されている。

## おわりに

平成16年より研究室の整備が始まり今年（平成21年）で5年の節目を迎えることになった。幸いにも平成20年度第2次補正予算でセンター8階にあるP2実験室・P2飼育室部分の大型高圧滅菌器とケージ洗浄機、9階部分の2台目の大型高圧滅菌器が措置された。これまでは1台の大型高圧滅菌器のみで片肺飛行の状態でおこなってきたがようやく完全装備の状態になった。また同時に小動物用CTスキャン、小動物蛍光・発光イメージングシステム



が共通機器として整備された。とはいっても予算は十分ではなくあらたな人員確保も必要であるが施設としては一通りの形は整った。現在の動物実験施設がかなり手狭で老朽化しているなか、その安全弁としての機能はようやく確保できた。

基本的なハード面が整備された中、今後第2期にむけてセンターとしての研究および研究支援をさらに充実させるようスタッフ一同努力していく所存です。ですのでよろしくお願い申し上げます。

(はたの まさひこ)



胚工学実験室JPG: 顕微鏡下でDNAを受精卵にマイクロインジェクションしトランスジェニックマウスを作製するところ



受精卵凍結保存JPG: 人工授精したマウス受精卵を液体窒素に凍結保存している。



ES細胞培養室JPG: 目的遺伝子をターゲティングベクターと相同組換えをしたES細胞よりキメラマウスを作製している。

# 千葉大学附属図書館亥鼻分館

行方 美知子

## 千葉大学附属図書館亥鼻分館の発足と発展

### 亥鼻分館前史（一）

#### — 公立千葉病院～旧制千葉医科大学 —

過去に発行された医学部85年史、同100周年記念誌においては図書館を語る頁がありませんでした。今回、医学部135周年記念誌の刊行に際し、医科大学図書館、医学部図書館等の名称で医学部と深く係わりながら活動を続けてきた図書館について紹介する機会を与えていただいたことに感謝いたします。

亥鼻分館のルーツは、明治13年公立千葉病院（医学教場を附設）に病院長兼教頭として赴任した長尾精一先生の功績に求めることができます。長尾先生は、同病院が県立千葉医学校、官立第一高等学校医学部、千葉医学専門学校と変遷していく間、校長として在職されました。その在職20年を記念し明治33年に「長尾文庫」という独立した60坪の図書館が建設されました。医学図書館の嚆矢です。「医学部85年史」の医専時代Ⅰでは、明治36年当時の千葉医学専門学校建物配置図において、玄関付近に図書室が既に設けられ当時外科学の三輪徳寛教授が図書主幹をされたとの記録があります。その後、大正15年には、千葉医科大学附属図書館が設置されて図書館運営に必要な「千葉医科大学附属図書館規程」「附属図書館閲覧細則」が明文化され、医科大学附属図書館には本館（医科大学本部内）と分館（病院内）を設置し本館には医科大学附属図書館長、分館には分館主任を配置し、図書委員会を設け図書館の予算、図書の購入、規程の改廃等を審議していました。以後、その基本姿勢は後の亥鼻分館に脈々として受け継がれています。初代の館長には、福田得志教授（薬物学）が補せられました。

昭和2年頃に職員として勤めた方の話によると、当時は現在の病院玄関前に木造の千葉医科大学事務局本部があり、その2階に医科大学附属図書館（本館）があったとのこと。書架の図書は金網に囲われており、利用者は閲覧したい図書を見つけたら先ずベルを押し事務室にいる職員を呼びます。そして読みたい図書の背表紙を金網越しに押し、中にある職員がそれを取り出して渡すという出納方式を

とっていたそうです。当時の利用者であった桑田次男氏（名誉教授・微生物学）の回想として、千葉医科大学に来てみて独立した図書館でなかったこと、10数人はいれば一杯になってしまう貧弱な図書館であったことに失望したことが亥鼻分館発行「ゐのはな10」に述べられています。

昭和19年頃には、太平洋戦争下で千葉市にもアメリカによる空襲があり、空襲警報が鳴ると職員は、今桜並木となっている連絡道路下の防空壕に学生と一緒に避難しました。また、図書館所蔵図書の一部は、長野県下伊那郡天下条村に疎開させることにより焼失をまぬがれました。このように、大正12年の関東大震災、昭和19年頃の空襲をくぐり抜けてきた大切な図書資料が現在へ引き継がれてきたことは、当時の図書館職員のためまぬ努力と大変な苦労のたまものと思われまます。

### 亥鼻分館前史（二）

#### — 新制千葉大学と医学部分館 —

昭和24年5月に新制千葉大学が発足し、旧制千葉医科大学は千葉大学医学部となり、附属図書館は医学部分館と改称されました。名称は変わっても図書館の活動は継続され、戦後は年々増え続ける蔵書を配架するための施設作りが急務となりました。昭和34年頃には、基礎医学新館が完成して全教室が移転し、図書館だけがその地に残されました。そのため、緊急な要件への対応は電話だけであり、学生、研究者に与えた不便は計り知れないものがありました。

昭和46年に医学部分館の新営第1期工事として、地上2階1,128㎡の建物が建設され、閲覧関連施設



写真1:昭和55年頃の医学部分館(後の旧・亥鼻分館)



及び事務室として利用されました(写真1)。閲覧環境は医科大学当時とは大きく異なり、ほとんどの図書資料が開架書架に配置され、利用者が自由に図書に触れて利用できる環境になりました。当時の利用者であった橋正道氏(名誉教授・生化学, 第五代亥鼻分館長)は, 昭和43年当時取り残された図書館へは800m離れていたため, 競争の激しい専門領域の研究ではひと時も無駄に出来ないと, 自費で自転車を購入し図書館通いをしたこと, その後新営された医学部分館の利用環境にとっても感激したことを覚えているとおっしゃっていました。この建物は, 現在, 厚生施設(学生食堂)として使われています。本来は, 第2期工事として書庫が建つ予定でしたが実現されないままになりました。そのうち, 亥鼻キャンパスに, 昭和50年4月看護学部図書室, さらに昭和52年10月に生物活性研究所(習志野市より移転)図書室が設置されました。研究領域に近い3部局がそれぞれの図書館(室)を持つことは, 財政的, 機能的に問題であるという指摘もあり, それらが統合した生命科学, 医科学分野を包括する複合図書館を目指すことになりました。こうした学内事情の他に, 当時の生物医学関係を中心とした学術情報量の飛躍的増大という学問的状况の変動から, 亥鼻地区の情報センターとしての役割が期待され, 学術情報の効率的な収集と集中化を目指した『医学生物情報図書館』構想が発案, 検討されることとなりました。

### 亥鼻分館の設置

こうした状況の変化と新構想に基づき, 昭和53年4月には, 亥鼻地区4部局(医学部, 看護学部, 生物活性研究所, 附属病院)の複合分館として亥鼻分館が組織上で発足しました。組織的には医学部から離れ, 附属図書館(西千葉)の傘下になりました。亥鼻分館発足時の事務組織, 設備及びサービスは以下のようなものでした。

**【事務組織】** 組織として医学部から離れ附属図書館亥鼻分館となることは単に名称の変更だけではなく, 使っている机, 椅子も管理する部局名が変わるため全て管理換物品として分館の物品管理簿に登録し直さなければなりません。総務係の苦労は大変なものでした。この時の事務組織は, 初代分館長に萩原彌四郎教授(神経薬理学)が就任され, 事務長, 総務係, 整理係, 閲覧係からなっていました。

**【設備】** 発足当初は前述の書庫が未完成のまま組織と名称が変わっただけでしたので, 図書を集

中管理するということができませんでした。書庫がないため, 医学部の貴重図書である東洋医学古医書コレクションも一時, 西千葉の附属図書館本館に保管を委託することになりました。また研究用図書は, 各図書館(室)に分散配架の状況が続くこととなります。収納スペースの改善が図られたのは, 昭和56年旧医学部基礎棟が合同校舎として改修され, その一部1,854㎡を仮の書庫として使用できるようになった時です。分散管理されていた約8万冊が合同校舎に配架できることになり保存機能が実現しました。しかし, 元が教室や研究室であったため, 書架を並べて置くには床の耐荷重が不足していましたので一部屋に数台しか設置できず書庫としては利用しづらいものでした。閲覧座席について言えば, 当時の利用対象者2,500人に対してわずか57席でした。

**【サービス内容】** 分館発足時をサービス面から見ますと, 昭和51年度から開始されていた, 教室単位に到着雑誌の目次情報をコピーして提供するコンテンツ・サービスが挙げられます。既成の目次情報と異なり, 分館及び各研究室に到着した雑誌の目次ですから, 本文が手近かにあるという情報をも伝える便利なサービスでした。

医学図書の分類は, 当初BMLC(Boston Medical Library Classification 1925)の日本語版を採用していましたが, 新しい医学領域に充分対応できていないという理由から, 米国国立医学図書館の分類表NLMC(National Library of Medicine Classification)を採用することになりました。新しい分野の図書に詳細な分類が与えられたことにより, 利用者にとって求める図書が探しやすくなりました。組織的な変革はあったものの建物は旧来のものを使った亥鼻分館の船出です。

### 亥鼻分館の新営

手狭になっている分館の状況を憂慮するとともに, 学内の医学情報センター機能の充実を図りながら利用者にとって快適な学習・研究環境を提供しようという新図書館構想が昭和56年度から検討され始めました。この構想の具現化には長い年月がかかりましたが, 学内の理解を得て概算要求を提出することとなり, ついに平成7年度の施設概算要求が認められ, 平成8年7月には, 当時において考えられる最高水準と言われる図書館が建設されました(写真2)。全学の関係者一同が待ち望んだ地上3階, 地下1階, 延3,784㎡, 閲覧席218席の亥鼻分館の新営です。新営された分館は, 医学, 生命科学, 看護学等



写真2:平成8年に新営された亥鼻分館



写真3:受付カウンター

の学問分野における研究及び学習の支援、国際化への対応、地域医療への支援、展示・博物館機能などが盛り込まれた図書館を目指していました。フロアレイアウトとして、地下1階と地上1階が研究フロア、2階は学習フロア、3階は卒後・生涯学習および地域医療サービスフロアとなっている建物の概要を紹介します。

**【設備面】** 正面入口に伸びるスロープの両側には皐月が植樹され、やさしい景観の中に玄関があります。曲面を活かした正面玄関には“Library of Health Sciences”と英文名称が掲げられています。1階フロアは(写真3)、受付カウンター、利用度が高い洋雑誌、新着雑誌コーナー、展示コーナーがあり、さらに情報検索コーナーは受付カウンターと密着させて配置し、館員がいつでも利用者に対しフォローできる体制を作っています。2階フロアは(写真4)、学生のための図書、参考図書を配架、視聴覚ブースも設置して最新の医療情報をビジュアル的に学ぶことができます。また、3名以上で利用するグループ閲覧室もあり、その利用頻度は非常に高くなっています。2階にも情報検索用PCが配置され、窓側にはゆったりとした閲覧スペースがとられています。さらに3階に上がると、地域医療サービスコーナー、1人用閲覧机、学内研修や講演会等に利用されるライブラリーホール等が設置されています。地階には、和雑誌が配架され、窓に沿って閲覧席が設けられています。建物が斜面を利用して建てられているため、地階窓側の閲覧席からは、町並みの景観が見られ開放感あふれる空間を創り出しています。また、全て電動集密書架を配した書庫もその奥に設置されています。

全館の設備面で特徴的なのは、七宝焼きを飾った壁や玄関吹抜け天井には人体の動脈、静脈を模したステンドグラスといった装飾が施されており、色と光のハーモニーを醸しだしていることです(写真5)。



写真4:明るく広い閲覧室



写真5:1階吹き抜け

### 亥鼻分館の発展

新営となった亥鼻分館も10年以上が経過した現在、学術情報環境の大きな変化もあり、それに伴う図書館活動もまた変革を求められています。雑誌は紙媒体の資料からネットワーク環境を利用した24時間利用可能な電子資料にとって代わられる時代になりました。図書館職員を介さないで利用できる資料が増え続けています。こうした利用環境により、インターネットPCがあれば、図書館に行かなくても



利用できるサービスが増えました。自宅から電子ジャーナルが利用できるになると図書館の役割は、見えにくくなるという一面はありますが、それらの利用環境を整えることも図書館の重要な仕事になっています。

しかし、こうした情報社会の中で、図書館における学習環境の整備は、さらに必要性が高まっていますし、利用者からも期待されています。具体的には、平成13年度に設置された英語学習用CALL端末の設置により語学の自学自習が可能になり、平成15年度には、情報リテラシー教育用に1人1台のノートPCを使った情報データベースの検索実習ガイダンスが実施されたことを挙げるができます。平成21年度には、図書館のWebページから、図書の貸出予約、貸出期間の延長、他館からの文献取寄せの申込などが24時間利用できる環境が整備されました。

最新の情報とは別に亥鼻分館には、「東洋医学古医書コレクション」という誇るべき資料が残されています。平成20年度には、樋口誠太郎氏（日本医史学会評議員）を中心とする献身的なご尽力により「千葉大学附属図書館亥鼻分館古医書コレクション目録」が出版され、さらに古医書の何点かは、本文を電子化し、図書館のWebページで一般公開する事業も進めています。電子化に関して言えば、昨今の図書館は、情報の収集だけではなく、大学の研究成果などを世界に発信する機能（機関リポジトリ、千葉大学ではCURATORと命名しています）も備えています。

こうした情報化社会において図書館は、何時でも何処からでも利用できる環境を作るという利用者に対する研究支援・学習支援機能がさらに求められていくことでしょう。また、所蔵する資料等を通じて地域貢献・社会貢献の役割も果たしていく必要があります。しかし、一方では学生に対するサービス、すなわち学習の場を提供し、自学自習を支援する役割を忘れてはなりません。この課題は今に始まったことではなく、昔から図書館機能の第一に利用者、とりわけ学生への支援を考え、それをどのように実現するかを熟慮しながら分館は運営されてきました。このことの経過は開館時間の推移に表れています。

昭和47年度、平日9:00~19:00・土曜日9:00~16:00；昭和53年度、平日9:00~20:00・土曜日9:00~16:30；昭和55年度、日曜日も13:00~17:00（平成4年度に完全週休2日制により一旦、土曜日は13:00~17:00に変更、日曜日は休館）；

平成11年度、平日9:00~21:45；土曜日12:30~18:00；平成19年度、土曜日・日曜日が10:30~20:00；平成20年度、土曜日・日曜日・祝日が10:30~20:00。

以上の推移は、利用者ができるだけ長く図書館で学習できるように考えてきた結果です。また、開館時間内での利用が困難な亥鼻地区の医療関係者、研究者に対して、緊急時の必要性から閉館時の24時間特別利用も昭和56年度から実施しています。

事務組織では、平成11年度に事務長制が廃止され本館に事務を一元化し、専門員（週2日）、2係体制、平成18年度には専門員（常駐）、1係体制へと変化しています。

これまでの亥鼻分館の歴史について述べてきましたが、分館がここまで発展したのは多くの先人の真摯な努力によっていることは申すまでもありません。歴代分館長、初代：萩原彌四郎（昭和53.4.1~57.3.31）、二代：林豊（57.4.1~61.3.31）、三代：降矢震（61.4.1~63.3.31）、四代：本田良行（63.4.1~平成2.3.31）、五代：橘正道（2.4.1~8.3.31）、六代：嶋田裕（8.4.1~12.3.31）、七代：安達恵美子（12.4.1~15.3.31）、八代：関谷宗英（15.4.1~17.3.31）、九代：瀧口正樹（17.4.1~）はいつの時代も亥鼻分館に愛情を注いでくださいました。

また、この間の亥鼻分館事務長（後に専門官、専門員）は櫻木茂（昭和53.4.1~55.3.31）、江口元（55.4.1~58.5.31）、谷島良治郎（58.6.1~60.3.31）、峰岸茂（60.4.1~61.3.31）、笈田定（61.4.1~63.3.31）、大野一郎（63.4.1~平成2.3.31）、多田隆幸（2.4.1~3.3.31）、鴫田英夫（3.4.1~4.3.31）、川島友三郎（4.4.1~5.3.31）、早瀬豊（5.4.1~7.3.31）、高橋一郎（7.4.1~9.3.31）、鈴木賢治（9.4.1~11.3.31）、専門員：青木公男（11.4.1~12.3.31）、長友良維（12.4.1~14.3.31）、五十嵐裕二（14.4.1~20.3.31）、行方美知子（20.4.1~21.3.31）、江波戸登弥子（21.4.1~）でした。

私たち亥鼻分館職員は、こうした先人の努力に感謝しつつ、今後も利用者のための図書館造りに邁進するつもりです。

最後に本稿を作成するにあたりご協力いただきました橘正道先生、石出猛史先生、五十嵐裕二様の皆様に厚く感謝いたします。

（なめかた みちこ）

# 千葉医学会

徳久 剛史

## 千葉医学会 最近35年間（1974年～2009年）の歩み

千葉医学会は、千葉大学医学部を中心に広く医学・医療の進歩に寄与することを目的として、千葉医学専門学校が千葉医科大学に昇格した大正12年（1923年）に設立されました。主な活動としては「千葉医学雑誌」の刊行のほかに、学術大会や千葉医学会例会の開催などを行なっています。最近では、医学研究や医療技術における高度化や専門化がますます加速される中であって、「人類の健康と福祉に貢献するために次世代を担う有能な医療人・研究者を育成し、疾病の克服と生命現象の解明に向け未知の領域に挑戦し続ける」という千葉大学医学部と大学院医学研究院のミッションの遂行に向けて、その活動範囲を広げています。ここでは創立86年に及ぶ千葉医学会の歩みのなかから「千葉大学医学部百周年記念誌」に記載された内容以降の最近35年間の歩みをまとめます。

### 千葉医学雑誌

千葉医学雑誌は、年間6回6号のペースで発行を続けており、平成21年8月の時点で85巻4号まで刊行しています。最近35年間での特記すべき内容としては、平成元年10月に「特集号：バイオエシックス」を発刊しました。バイオエシックス（生命倫理学）の中でも医学医療の対象となるトピックスを医学部教員に執筆していただき、それらへの対処の仕方や意見等を千葉大学の教員で倫理・哲学・法律・経済の専門家に執筆していただきました。大変充実した内容で、読み応えのある特集となりました。

また、平成7年（71巻1号）からは、和文・英文の目次および要旨をインターネットの千葉医学雑誌のホームページ（<http://www.c-med.org/>）において公開しています。さらに平成18年からは、千葉大学附属図書館の協力を得て千葉医学雑誌を電子化し、千葉大学学術成果リポジトリ「CURATOR」（<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/index.html>）において全文を無料で閲覧できるようにしました。近年中には千葉医学雑誌の第1巻から全て電子化してインターネットでの公開を予定しています。

## 千葉医学会学術大会

千葉医学会学術大会は、会員に医学・医療に関する最新学術情報を伝えるために毎年1回のペースで、千葉県医師会学術大会との連合大会として開催してきました。しかし、平成12年に千葉県医師会が独自の学術大会を創設したため、平成14年の第77回からは千葉医学会の単独開催となっています。昭和63年の第64回までは、学術大会の形式も特別講演、シンポジウム、話題など各回で異なりましたが、平成元年の第65回からはシンポジウム形式やシンポジウムと特別講演を組み合わせた形式で行なわれるようになりました。さらに千葉医学会の単独開催となった平成14年の第77回からは、千葉医学会に所属する教室のOBでグローバルに高い評価を受けた医療や研究をされた先生方の業績をご本人にご講演いただき、さらにそれが現在どのように受け継がれ、展開されたかを後輩の先生にご紹介いただく形式で開催されています。ご講演される先生には、診療、研究に没頭されていた若き日の体験を語っていただくことで、現役の医学生にも強い感動と示唆を与えていただいています。第52回以降の各回の学術講演の演者とタイトルを次頁以下に記載致します。

### 千葉医学会例会

千葉医学会所属の各教室主催で医学・医療に関する学術研究会が、千葉医学会の例会として年間で17～20件程度開催されています。各例会では、その年度内に行なわれた最新の研究成果の発表と討議などが行なわれています。そして、平成21年3月末現在では第1188回の開催数になっています。

### 会員数の推移

正会員数は、昭和50年3月末で735名でしたが、その後順調に増加し平成3年には2000名を、平成15年には3000名を突破しました。しかし、ここ数年はやや減少傾向にあり、平成21年3月現在で2873名となっています。名誉会員64名と賛助会員8病院が加わると、総会員数は2945名となります。

千葉医学会賞と千葉医学会奨励賞の創設

千葉医学会会員と医学部や大学院学生の研究活動の活性化ばかりでなく、彼らのキャリア・アップと研究マインドの育成を目的として、平成20年度から千葉医学会賞と千葉医学会奨励賞を創設しました。千葉医学会賞は、基礎医学部門と臨床研究部門に分かれており、基礎医学部門では、先端医科学分野の進歩において顕著な貢献をした研究者に、また臨床研究部門では、最先端医療や医療水準の向上に顕著な貢献をした研究者に贈られます。また、千葉医学会奨励賞は、基礎医学や臨床研究の分野で顕著な研究成果を発表し、かつ将来の発展を期待し得る若手研究者に贈られます。

【平成20年度第1回受賞者】

千葉医学会賞：基礎医学部門 山下政克（免疫発生学）「Th2細胞分化と機能維持のエピゲネティクス」  
 臨床研究部門 南野徹（附属病院循環器科）「心血管系再生と老化のメカニズムの解明と先端医療開発」  
 千葉医学会奨励賞：古賀俊輔（医学部6年）「BHD遺伝子異常に起因する多発性肺嚢胞疾患の病理－反復性気胸に対する新たな洞察」  
 川口憲治（医学部6年）「キネシン分子モーターの1分子顕微解析による神経変性疾患メカニズムの解明」  
 澤井撰（神経内科学）「プロテオミクスを用いた神経免疫疾患活動性マーカーの網羅的解析」

千葉医学会学術大会における特別講演等の演者と演題名

回数	開催年	演者	演題名
52	昭和50年	真島吉也, 小越章平	完全静脈栄養法
53	昭和51年	石田名香雄	肝炎ウイルスと肝炎
54	昭和52年	小張一峰	腸管感染症の病態からみた治療の問題点
55	昭和53年	吉川政巳	老年病学の進歩
56	昭和54年	平山恵造, 鈴木二郎	脳血管障害 (パネルディスカッション)

57	昭和55年	稲垣義明, 大藤正雄, 高見沢裕吉 河野守正, 牧野博安	聴音波診断の実際 (パネルディスカッション)
58	昭和57年	川崎富作, 斎藤俊弘, 増田善昭 宮内好正	大動脈疾患を巡って (パネルディスカッション)
59	昭和57年	清水喜八郎	抗生物質療法の現状と問題点
60	昭和58年	永井友二郎, 金子好宏	うつ病への対応とその間にあるもの
61	昭和60年	市川平三郎	画像診断の進歩とがん治療 奥井勝二 消化器癌治療の進歩
62	昭和61年	道場信孝	虚血性心疾患 (IHD) の高次予防の考え方とアプローチ 古田昭一 高年齢者 (70歳以上) の虚血性心疾患に対する積極的療法の現況について
63	昭和62年	平田幸正	糖尿病へのアプローチ診断と予後をめぐって
64	昭和63年	小出桂三	腎の生理と機能障害 (各種治療法を含む)
65	平成元年	笹月健彦	疾病の宿主要因
66	平成2年	島田馨	Compromised host 感染症
67	平成3年	郡司篤晃	医療計画の課題としてのプライマリ・ケア
68	平成4年	大村裕	脳と肥満
69	平成5年	寺澤捷年	老人と漢方
70	平成6年	小幡裕	最近の肝炎の診断と治療をめぐって
71	平成7年	宮内好正	心臓弁膜症外科治療の現況
72	平成8年	江原正明, 竜崇正 更科廣實 木村秀樹, 辻井博彦, 山崎修道	がん治療の最近の進歩 (シンポジウム)



### 第3章 関連施設, 団体の歩み

- ウム)
- 73 平成9年 福田健, 西牟田敏之, 寺田修久  
田辺恵美子, 河野陽一  
気道アレルギー, アトピー性皮膚  
炎, 食物アレルギーの病態と治療  
(シンポジウム)
- 74 平成10年 菅野治重, 山岸文雄, 野田公俊  
岡慎一  
エマージング感染症の特徴と対策  
(シンポジウム)
- 75 平成11年 高橋和久, 北原宏, 下山直人  
松井英雄  
腰痛 (シンポジウム)
- 76 平成12年 金澤康徳, 山田研一, 津山嘉彦  
浅野武秀  
糖尿病 最近の進歩 (シンポジウム)
- 77 平成14年 川崎富作  
川崎病との出会いから世に認めら  
れるまで  
寺井勝  
最新の病因研究
- 78 平成15年 市川平三郎  
消化管二重造影法の開発から, 早  
期胃癌診断実践の道のり  
丸山雅一  
診断学の進歩からみた消化器癌検  
診システムの諸問題
- 79 平成15年 寺島東洋三  
細胞周期と放射線  
松本智裕  
有糸裂期のチェックポイント機構  
とその変調がもたらす発ガン  
宮本忠昭  
重粒子線による早期肺癌治療  
— From radiotherapy to radiosur  
gery —
- 80 平成16年 磯野可一  
千葉大学第二外科が歩んできた食  
道外科の歴史と実績  
島田英昭  
21世紀COE拠点形成プログラムで  
目指す食道癌診療の新しい展開
- 81 平成17年 宮治誠  
かびと共に40年— 皮膚科医から  
基礎研究者へ  
亀井克彦  
肺真菌症の原因菌とその病原性  
について
- 82 平成18年 鍋谷欣市  
恩師に学んだ東洋医学の手習い草  
紙とその展開  
寺澤捷年  
漢方医学の普遍性を如何に担保す  
るか? — 異なったパラダイムの  
和諧を求めて —
- 83 平成19年 大藤正雄  
肝臓癌の臨床  
— 画像が開く先端医療 —  
横須賀收  
変貌しつつある肝炎治療  
— 肝癌発症の抑止に向けて —
- 84 平成20年 多田富雄  
教えられたこと, 伝えたいこと  
中山俊憲  
免疫システム, その統御による免  
疫治療の開発研究
- 85 平成21年 島崎淳  
前立腺癌の内分泌療法  
市川智彦  
前立腺癌における臨床ならびに基  
礎的研究と現状の課題  
(とくひさ たけし)

## ゐのはな同窓会

鈴木 信夫

### 同窓会通史—20世紀から21世紀への軌跡

同窓会の活性化は永遠の宿命と言っても過言ではなさそうです。特に、若い会員の参画問題です。そもそも、21世紀初頭において世の仕組みが大きく変わろうとしている時、同窓会という組織体にも存在意義が問われる好機でもありました。

さて、ゐのはな同窓会報の学生編集委員として昭和41年(1960年)より同窓会組織の一端に参画させていただいたことから、多くの諸先生による並々ならぬ組織維持へのご努力を知ることとなりました。その上で、この任意の団体の未曾有の力を感じざるを得ません。源泉力が人の心、人との繋がりがあると透視すれば、その力の貴重さを理解できるかもしれません。従って、21世紀にあたり、あらためて「千葉大学ゐのはな同窓会とは何ぞや?」という問いが、心ある会員の方々より噴出してきました。そのような議論がなされながらも、多くの方々の努力により実行されてきた内容を表のように大略記すこととします。

本会の本部としての活動基盤としては、情報の収集とその広報、および諸種の会務がありますが、必ずしも前者と後者とが一体化してきたとは言えず、各地での会員の活動を把握できてきたとも言えない面がありました。そこで、1998年6月13日、「温故知新」、「持続可能な同窓会」等々のスローガンの下、新たな企画として、同窓会員とゐのはな同窓会報編集部員との懇談の会が、千葉駅ビル・ペリエホールにて開催されました(①、同窓会報第118号に詳述)。定例の会議類とは違うこのような糾合の場は、広報・編集を考える会(同窓会報第141号に詳述)、神奈川や東京ゐのはな会などの諸先生方のご尽力による「首都圏ゐのはな会」(⑭)や全国支部会(⑰)というような形でも開催されました。

一方、中央青山監査法人などによる外部組織の協力も得て、ゐのはな同窓会の組織形態についての検討(⑦)や会員の同窓会に対する考えを聞くアンケート調査(⑱)などの作業が行われました。そのような種々の試行錯誤と共に、ゐのはな同窓会会則の改定が、渡辺武会長、佐藤甫夫先生、大藤正雄先生らによる綿密な協議に基づき、原案作りや常任理

事会などでの議論を経ながら行われ、組織の近代化がなされてきました(②、⑯)。また、本部事務組織の近代化対策も必要でした。組織活動の充実化に伴う事務職員の配置です。事務長と各々の会務(総務、会計、事業、広報、編集)分担における職員の配置が計られるように、パート職員も含めて努力がなされてきております。但し、医師募集広報などによる寄附収益の増大化の努力も試行されることとなりました。

活性化の一環としての事業拡大(②)や組織化(⑥)の努力では、人材の交流策も計られ(④)、また、学生との交流機会の改善がなされました(⑩、⑫、⑯)。同窓会会長の医学部卒業式への参列もそのための1例として開始されました。一方、卒業生会員への様々な支援活動も活発に行われました(⑨、⑬、⑮)。その中では、会員外一般社会人へのアウトリーチ活動も含まれ、千葉大学医学研究院教官のご支援も得て、ゐのはな同窓会の社会におけるステータスの向上化がなされました(⑨)。

母校自体への支援にも力が入られ、従前よりの施設の整備や備品の購入支援のみならず、20世紀遺産の保存対策に貢献することとされました(③)。また、新しい世紀に向けての企画としては、同窓会が設置ないし支援してきました同窓会館と記念講堂の行く末です。特に、前者について、補修しても老朽化対策が限界であると判断され、後者の改修も視野に入れて、2000年頃より検討がなされることとなりました。例えば、同窓会資産の中に基金が設けられてきたことから、基金設立に労苦をかけていらっしゃる諸先生へ、基金を活用する旨の賛意を得るよう努力がなされてきております(⑧)。その上で、21世紀初頭における新たな同窓会館の設立へと事業化されることとなりました(⑧、⑳)。さらに、器だけでなく、心の絆の刻印もなされることとなりました(㉒)。

記載した活性化と近代化の作業における行く末についてですが、その対策も計られてきました。情報交換手段としてのインターネットの活用です。動画配信が可能なオンライン会報の設置があります(㉑)。さらに、他大学同窓会との交流でした(㉒)。東北大学、東京医科歯科大学、獨協医科大

### 第3章 関連施設、団体の歩み

学、名古屋大学、日本医科大学等々です。但し、やり残されていることも多々あります。例えば、各年代のクラス会を糾合させる評議委員会の充実化です。

では、以上の先に何があるかです。最後の記述として、将来、この拙文をお読みいただく方々への私見を交えてのメッセージです。同窓会とは、あくまでも、任意のものであります。従って、発展や消滅

という運命は、会員自身の手には任されている何ともか弱い組織です。しかし、翻ってみると、定められた事しかなし得ない組織に満足がいかない場合、この同窓会を介して、医学・医療の改革・充実化に貢献することも、可能ではないでしょうか？例えば、全国大学同窓会という新たな視点からの日本の医学・医療の革新とその革新の成果の世界への発信です。

#### 同窓会活性化の軌跡（1998～2009）

- 
- |                |   |
|----------------|---|
| 1998年 6月13日    | • 同窓会員とゐのはな同窓会編集部員との懇談の会が開催される①   |
| 1999年 6月26日    | • ゐのはな同窓会総会にて、ゐのはな同窓会賞における学内・学外助成の充実化、学生図書助成、会費改訂（3,000円より5,000円へ）などが決定される②         |
| 2000年—         | • 亥鼻キャンパスに関わる支援が拡大される（辛亥革命記念碑の整備や同窓会館修復など）③   |
|                | • ゐのはな同窓会報に医師募集広告などを掲載し人事交流支援作業がなされる④   |
| 2001年 9月—      | • ゐのはな同窓会ホームページ <a href="http://www.inohana.jp/">http://www.inohana.jp/</a> が開設される⑤ |
| 2002年—         | • 各地区ゐのはな同窓会への支援費などにより地区ゐのはな同窓会の活性化支援がなされる⑥   |
|                | • 将来検討委員会が設定される⑦  |
|                | • 同窓会館や記念講堂のあり方と新たな会館設立のための募金活動が検討されるようになる⑧   |
| 2003年 7月18—31日 | • SARSなどの医学危機管理問題に対処する社会人コーディネータ養成講座が開催される⑨   |
| 8月6日           | • 千葉大学医学部における医学教育・卒後教育を紹介する会が開催される（－2008年）⑩   |
| 9月29日          | • ゐのはな同窓会意識調査報告が公表される（ゐのはな同窓会報第134号別冊に掲載される）⑪                                       |
| 2004年—         | • ゐのはな同窓会学生編集部が復活する（－2009年）⑫  |
|                | • 電子カルテ講座が開催される（－2007年）⑬  |
|                | • 「首都圏ゐのはな会」（フォーラムゐのはな）が開催される⑭  |
|                | • 医学文献オンラインアクセスが開設される（－2009年）⑮  |
|                | • 千葉大学ゐのはな同窓会会則の改訂が行われ、学生の会員化や総務会の設置などが新たに規定される（詳細はゐのはな同窓会報137号にて記載）⑯               |
| 2005年 2月12日    | • 全国支部会が開催される（－2007年）⑰  |
| 2006年—         | • 医師偏在化などの医療問題に関わるアンケート調査などが行われる⑱   |
| 2007年—         | • 他大学同窓会との交流が開始される⑲   |
|                | • 新ゐのはな同窓会館設立（千葉大学医学部創立135周年記念）事業が組織的に検討されることとなる（詳細はゐのはな同窓会報146号にて記載）⑳              |
| 2008年—         | • オンライン会報が開設される㉑  |
| 2009年—         | • 千葉医学の伝統言語化作業がなされる㉒  |
- 

注：丸数字は本文中引用箇所を示す。  
(すずき のぶお)

# 猪之鼻奨学会

服部 孝道

## 亥之鼻奨学会の活動状況 はじめに

猪之鼻奨学会については八十五年史には記載がなく、その補遺の意味をこめて、昭和43年3月に猪之鼻奨学会の鈴木正夫会長により、財団法人猪之鼻奨学会史という小冊子が刊行されている。この小冊子は現在では入手が困難であるが、百周年記念誌に当時の松本胖会長がその内容を要約しておられる。本稿は100周年以降の歩みを書くようにとのことであるが、それ以前のことにも触れながら記述することにした。

## 財団法人猪之鼻奨学会の設立の経緯

本財団は大正4年に千葉医学専門学校初代校長（のちの千葉医科大学初代学長）三輪徳寛先生が、在職25年祝賀のために受けた金額の大部をもとに設立された。当時は日露戦争後であり、日本経済は疲弊しており、苦学生が多く、しかも大正3年に勃発した第一次世界大戦により、欧州特にドイツから輸入していた医学書、薬品の輸入が途絶したため、本学での医学研究・教育に大きな支障をきたす状況であった。時あたかも大正天皇の御即位大礼に際会したので、これらの事情を考慮して本財団設立に至った。創立当時の資産5千円の半分余が三輪徳寛校長からの寄付金であり、その後多くの会員からの寄付があり、1年後の資産は6万8千円を超えていた。しかし、当初の目的は資産10万円を集め、その利子にて会の運営を行うこととされたが、時代は経済的に厳しい状況下にあり、それが可能となったのは設立後17年の昭和7年度からであった。

## 過去における本会の活動

本会の事業は設立以来「医学および薬学の研究事項の優秀な者に研究費を補助すること」および「医学および薬学の学生にして修学中途に事故等により学資の欠乏を告げた学生に学資を貸与すること」を事業内容としている。つまり、研究助成と学生への奨学金貸与であり、戦中・戦後の期間も休むことな

くその活動を続けていた。さらに本財団の活動は研究助成と奨学金貸与にとどまらず、本学の発展に多大な貢献をしてきた。その中でも特筆すべきは、亥鼻キャンパスの購入で、大学にお金がない時（すなわち国からの予算が下りない時）に1万4千坪余の土地を本会が購入して大学に貸与したとのことである。その他薬草園の購入、同窓会館と記念講堂の建設にも多大な貢献をしてきた。

本会のユニークなところは、本会によって医学部と薬学部の絆が長年強く保たれ続けられたことである。本会設立当時、薬学は千葉医学専門学校薬学科であり、大正12年からは千葉医科大学附属薬学専門部、昭和25年5月から千葉大学薬学部となり、別の学部になったが、平成13年より千葉大学大学院に医学薬学府が設立されて再び同一の組織にもどり、さらに平成16年には医薬総合研究棟ができ、薬学部がゐるのはなほの地にもどってきた。これらの流れに本会の存在・活動がいささかの貢献をしているのではないかと思われる。

## 過去35年における本会の活動状況

上述の如く、本会の主な活動は医学部と薬学部の学生（大学院生を含む）や教官に研究補助金を助成することと、奨学金を貸与することである。研究補助金は毎年医学部の3、4名、薬学部の1、2名に助成を続けている。奨学金は医学部4、5名、薬学部2、3名に貸与してきたが、平成になってから希望者が減り、この数年は年に1人いるかどうかである。また、学術奨励金を医学部と薬学部毎年助成している。さらに、平成13年度から卒後・生涯教育助成金の交付を医学部と薬学部に行っている。薬草園の整備・管理も引き続き行っている。これらの運営は両学部の関係者からなる理事ならびに評議員によって行われており、その活動内容は平成8年より猪之鼻奨学会会報を作成し、医学部関係者にはゐのはな同窓会報と共に、薬学関係者には薬友会報と共に毎年送り届けられている。表はこれまでの本会の会長名である。

### 第3章 関連施設, 団体の歩み

#### 【猪之鼻奨学会の歴代の会長】

大正4年12月	三輪 徳寛
大正13年11月	松本高三郎
昭和4年11月	高橋 信美
昭和15年12月	小池 敬事
昭和33年10月	谷川 久治
昭和37年7月	鈴木 正夫
昭和51年5月	松本 胖
昭和58年5月	萩原弥四郎
平成3年5月	村山 智
平成8年5月	清水 文七
平成12年5月	近藤洋一郎
平成16年5月	千葉 胤道
平成20年5月	服部 孝道

#### 本会の財政基盤

本会の活動は基本財産の運用収入と寄付金で行われてきたが、近年の低金利政策により利子の収入が激減し、寄付金でなんとか活動を維持しているのが現状である。しかし、寄付金の額は年によって変動が大きく、多い年は500万円を越えるが、少ないと

100万円を切る年もあり、安定してない。しかも近年減少傾向にあるため、平成17年から18年にかけて一口5千円で募金を行った結果、267名から計330万5千円の寄付をいただいた。今後小額でも多くの関係者から寄付をいただく方策をたてる必要があるように思われる。

#### 今後の問題点

このように歴史のある本会であるが、今後継続していけるかどうか、現在大きな岐路に立たされている。それは平成20年12月に施行された新たな公益法人法により、5年以内に本会をどのような法人形態にするか決めなければならないからである。本会の場合は公益財団法人に移行できれば良いのであるが、そのためには「不特定多数の利益の増進に寄与」していることが必要で、千葉大学の医学部と薬学部の関係者を対象とした本会の活動では無理のようである。今後本会をどうするのが良いか、現在関係者で検討を続けているところである。

(はっとり たかみち)



# 篤志献体団体千葉白菊会

## 千葉白菊会のあゆみ

### 1. 白菊会の始まり

昭和40年千葉白菊会は、白菊会本部（東京）千葉支部として、初代支部長齊藤利一氏が自宅を事務所に活動を開始した。

当初は会員数11名であった。



齊藤利一 初代会長

当時の解剖学の指導教授は福山右門氏であった。昭和50年からは嶋田裕教授、そして平成12年からは森千里教授が引き継がれ現在に至っている。

献体を理解いただき、1人でも会員を増やす為、活動開始当時は、担当教授、関係職員、千葉白菊会

の役員がキャラバン隊を組んで市町村役場や高齢者施設を訪問し、会員募集に苦勞をした。初代齊藤利一会長が29年間務めたあと二代目会長は山内彰吉氏が引き継ぎスムーズな運営になった。

### 2. その後の活動

白菊会の大きな目標は、献体活動を理解していただき会員数を増すことである。この目標を達成するには、関係者が一丸となって啓蒙活動を進める以外にはなかった。その為には白菊会として年1回総会の開催、会報も発行し、会員相互間の交流を深めることに努めた。又、他大学の団体ともお互い情報交換をしたり、全国大会にも積極的に参加した。そして昭和57年10月16日千葉白菊会として独立し、翌58年に「医学及び歯学の教育のための献体に関する法律」が制定され、一般社会にも献体運動が認知された。

### 3. 会員数の動向

昭和40年11名であった会員数も、昭和47年100名、昭和58年600名、昭和61年1,000名、平成8年2,000名を超え、平成22年9月末は2,145名である。

そして献体成願者も平成22年9月現在1,738名になり、大学の解剖学講座の学習には心配のない状態が続いている。



肉眼解剖学ガイダンス



#### 4. 今までの大きな活動

- (1) 平成12年医学研究に関する承諾書を医学部長宛に提出するようにした。

これは正常解剖だけでなく、医学研究や標本にも自分の体を活用しても良いという主旨である。より献体の活用をして充実した医学教育を進めている千葉大医学部の取組みは千葉大方式として他大学へも大きな影響を与えた。

- (2) 会員が解剖施設見学

白菊会総会時に希望者のみであるが解剖学講座で使用している関連施設を見学した。



実習終了後の学生と懇談会



献体の碑とさるすべり

- (3) 医学部学生、医学薬学府大学院修士課程学生のガイダンス時に、白菊会役員が出席し、白菊会に入会した動機や理由を話したり意見交換を行っている。

- (4) 解剖学講座終了時に、学生と白菊会役員、指導教授、准教授等が軽食をとりながらの懇談会を開催している。

- (5) 亥鼻キャンパス校門前に「献体の碑」を建立(2004.12.21,平成16年)し、年1回献体成願者名簿を奉納している。又年の初めには医学部主催で碑に献花式を行っている。

#### 5. これからの白菊会

発足当初から白菊会の運営は白菊会役員の手で行って来た。

当初の目標であった会員募集については、在籍会員2,000名を超えたので達成できたと思っている。

これからは大学の関係部門が中心になって、より効率的に又今まで以上の内容で運営を行うことが最善であると考え、現在その準備を進めているところである。

白菊会は大学教育の為にある団体である。大学と白菊会の協力体勢は今まで以上に保つべきである。



千葉白菊会総会 学生代表挨拶

#### 6. 千葉白菊会の課題

献体の主旨を理解していただける人達が増加したので、これからは正常解剖という一面だけでなく、より高度でかつ広範囲な教育と将来の医学、医療技術の発展の為にいかに会員が協力できるかを、大学と共に考えることである。